The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生教育コースにおける日本文化理解授業 : 日本文化書道実践報告
Author(s)	馬場, 裕子
Citation	日本語・日本文化. 2019, 46, p. 115-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

留学生教育コースにおける日本文化理解授業
―日本文化書道実践報告―

馬場　裕子

はじめに

留学生の数は、平成 29 年度５月１日現在 267, 042 人となった（独立行政法人日本学生支援機構ホームページ）。その中で、高等教育機関在籍者は 188, 384 人、日本語教育機関在籍者は 78, 658 人である。地域別にみるとアジアからの留学生は 249, 242 人で、続いて欧州からの 8, 669 人、北米からの 3, 182 人と続き圧倒的にアジアからの留学生が多い。中でも中国からの留学生は全体の 40. 2% を占める。故に、残りの約６割が非漢字圏出身者となる。

本稿が対象にしている「書道」は、華道や茶道と並び日本の伝統文化の一つである。作品には、中国で生まれた漢字を素材とした作品と日本固有のかな書道、漢字とかなを両方使用する漢字仮名交じり文という作品に大別される。故に漢字になじみのある留学生の４割は見たことがあるかもしれないが、残りの６割の留学生にとっては漢字や仮名を素材とする芸術はほとんど見たことがないと言えよう。つまり、どんな道具でどのようにして作成するのか、どんなルールがあるのかは未知の世界であると言える。

他方、外国人観光客が日本で体験したい事 TOP10（SAMURAI’ve ホームページ）の７位に書道がランク付けされている。ちなみに１位は温泉、２位は歌舞伎、３位は着付け、４位に茶道、８位に華道が入っている。外国人観光客にとっては、書道・華道・茶道はよく知られた伝統文化だと言える。

さて、大学で書道を学べる場というのは、多くは国立私立大学の教員養成系の大学学部に設置された日本人学生のためのコースである。これらのコースは全国 31 大学で設置されている（スタディサプリホームページ）。特別に留学生向けの

書道専攻というものは、管見の限り見当たらない。つまり、留学生にとって書道を専門的に学ぶ場は勿論のこと体験する場も、高等教育機関での留学生教育、多くは日本語教育の中での日本文化理解周辺か国際交流センターや日本文化センターと呼ばれる公的機関の１回から２、３回で完結の体験的位置付けということになる。継続して修めたい場合は、地域の書道教室に通うことになると考える。

このように日本の伝統文化である「書道」を深く体験する場が留学生にとっては限られていること、日本語学習や日本文化体験が留学生教育の中心に据えられているにも関わらず文化の表層的な模倣に終始しているという状況を鑑みて、筆者は留学生教育の中で限られた期間ではあるが１回完結ではなく、芸術としての書道を体験してもらうために半期で開講される「日本文化理解」授業の中で、以下の授業を実践した。本稿はその実践報告である。

１．実践の場の特徴

日本国内の国立Ａ大学外国人留学生受け入れプログラムの中の、学部留学生、短期交換留学生、研究生を対象に開講されている全14コマ（１コマ90分、８回、内訳；１コマ×４回・２コマ×２回・３コマ×２回）の「日本文化理解」授業の取り組みを報告する。

留学生は、タイ人交換留学生３名、オーストラリア人交換留学生２名、中国人研究生１名、中国人学部留学生１名の計７名が受講した。上記の交換留学生のうち４名は、日本語レベルは初中級レベルで、本学での交換留学生開講科目である日本語総合クラス『みんなの日本語』復習クラスを受講している。研究生１名は、同大学大学院受験予定者１名である。

中国人留学生２名以外を除いて留学生の書道経験は無い。

２．授業概要

２－１．概要と目標

この大学で開講されている「日本文化理解」授業は、日本語レベルに関係なく受講することが可能である。表１が実施した授業のシラバスである。授業概要は、「文化」とは何かを問い直す為に、書道実習を通して文字がなぜ芸術へと

昇華して行ったのかを考えたり、フィールドトリップ、Exhibition などを通して、履修生相互のバックグラウンドを理解しつつ他者理解や異文化理解を深めたりすることである。また、授業の目標は、書道を体験することと授業のまとめとして行う Exhibition のための書道作品や発表の準備ができることの２点である。

表１　実施授業シラバス（筆者作成）

2018 年春学期　日本文化理解　シラバス	
担当 :馬場 裕子	日時 :水曜日４限
１．授業概要 「文化」とは何かを問い直す為に、書道実習を通して文字がなぜ芸術へと昇華して行ったのかを考えたり、フィールドトリップ、Exhibition などを通して、履修生相互のバックグラウンドを理解しつつ他者理解や異文化理解を深めたりする。	
２．授業目標 ・書道を体験する。 ・Exhibitionのための書道作品や発表の準備ができる。	
３．スケジュール １　４月18日　オリエンテーション ２　５月２日　建部大社とアクア琵琶見学事前指導 ３　６月６日　留学生のための書道①ひらがなとカタカナ ４　７月４日　留学生のための書道②漢字仮名交じり文 ５　７月24日（火）　10:30 ～14:20　建部大社見学、事後指導２コマ連続 ６　７月26日（木）　10:30 ～14:20　アクア琵琶見学、事後指導２コマ連続 ７　８月１日（水）　13:00 ～18:00　留学生のための書道③書道実習３コマ連続 @ 書道教室 ８　８月２日（木）10:00 ～15:30　留学生のための書道④書道実習２コマ連続とまとめ Exhibition1 コマ	
4. 成績評価 出席及び授業への参加度40%、Exhibition 出品及び発表60%。	

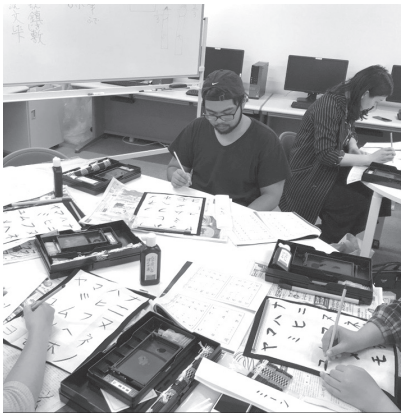
２－２．本実践の指導者

本実践授業担当者は大阪教育大学中学校課程国語科書道専攻課程において中国書道史・日本書道史や書道の技法および鑑賞方法について学んだ。高等学校書道専修免許及び中学校国語（書写を含む）、小学校国語（書写を含む）の専修免許保持者である。大学卒業後、高等学校書道教師として教壇に立った経験を持つ。また、書道教室も主宰しており中南米およびオーストラリアでの文化交流事業（書道）に参加した経験を持つ。さらに、日本文化書道を世界に発信していくために、2018 年６月「グローバル日本文化書道研究会」を立ち上げた。

３．具体的な実践の内容とその過程

授業概要に示したように、最終的な目標は Exhibition のための書道作品制作であるが、筆者は実践に当たって、授業前半４回目と後半７回目の間の第５、６回目にフィールドトリップを位置づけ地域理解とも関連づけた。

最初の２コマは、４月 18 日と５月２日に各１コマずつ実施した。オリエンテーションの内容は、指導者によるガイダンスと留学生が日本文化理解授業の見通しを立てるために、グループ活動により本授業を通して学びたいことを話し合った。５月２日は、フィールドトリップの建部大社[1)]とアクア琵琶[2)]の事前学習を行った。その後の６月６日・７月４日実施の２コマは、日本語科目の「文字・語彙」の範疇での活動を指導者が意識し、ひらがなとカタカナの毛筆小筆による書字指導を行なった。これは、日本語独特の表記文字であるカタカナとひらがなの特徴を掴み、特に直線的で理解が比較的易しいカタカナと曲線的で形の取りにくいひらがなを対比的に学ぶことを目的とした。指導者によりホワイトボード上に模範が大きく示されたことによって、留学生はそれぞれの文字の形の特徴を捉え、半紙上にひらがな、カタカナを再現できたと思う（写真１、２、３）。



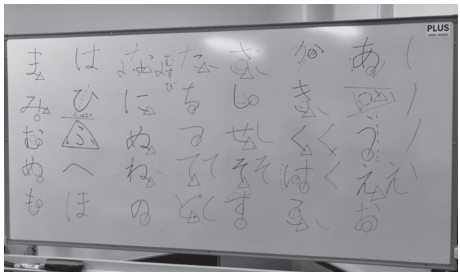


写真１）カタカナ練習風景（筆者撮影）　写真２）ひらがなの字構模範（筆者撮影）

残りの 10 コマのうちの４コマは、７月 24 日と７月 26 日の２回２コマずつに分けてフィールドトリップを実施し、地域理解・日本文化理解を促すために大学キャンパスから約 30 分に位置する「建部大社」と「アクア琵琶」を訪問した。「建部大社」では、建築物、おみくじ、お土産、お賽銭に特に興味を示していた。おみくじでは恋愛運がもっぱらの話題であった（写真４）。

「アクア琵琶」は、カッパと雨傘を装備して雨体験を行い、琵琶湖の水と生き物や水害の歴史、ダムの作りを見学した。

後半の６コマは８月１日と８月２日の２日間３コマずつの集中講義として実施した。この２日間は、同大学教育学部の書道室を借りての実習を行った。８月１日第１日の１コマ目は、前述の小筆の継続的学習として「写経」を行った。文字通り般若心経を全部写し書きすることである。全員集中力が高く、途中で気力が絶えることなく約 90 分かけて取り組んだ。私語がほとんどないのがこのクラスの特徴である。筆者が驚いたのは、日本国内の高等学校で１年生の選択科目としての小筆の授業を実施した際には、高校生はその扱いに四苦八苦して、半数は太くなりすぎたり墨をつけすぎたりしてうまくいかないのであるが、留学生は毛筆そのものの扱いは学習してきてはいないが、硬筆と対照した筆の構造及び墨の量と線質との関係について認知していると考えられ、特に練習することなく小筆の

扱いや墨の量に注意して完遂した（写真５）。

２コマ目は、「永字八法」で書道の基本点画を指導した（写真６）。「永字八法」とは、漢字の「永」のなかに八つの基本点画の用筆法１）側（点）、２）勒（横画）、３）努（縦画）、４）趯（はね）、５）策（短い横画）、６）掠（左払い）、７）啄（短い左払い）、８）磔（右払い）の技法を示すものである。その他、起筆・送筆・終筆という書法の運筆の最も基本的な技法について指導した。指導者揮毫前と後の留学生の練習比較により明らかに揮毫後の呼吸や起筆やはね、はらいに変化が見られ、留学生はこれらの諸技法を実際の指導者の揮毫を見ることにより瞬時に体得したと思われる。

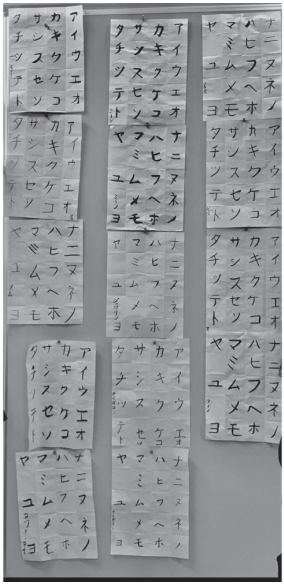


写真３）カタカナ作品（筆者撮影）

写真４）建部大社（筆者撮影）

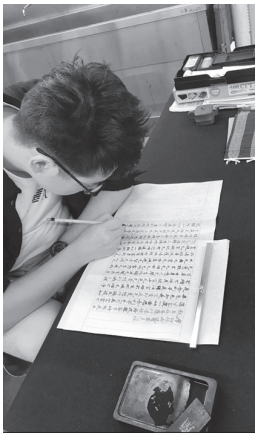


写真５）写経（筆者撮影）

写真６）永字八法（筆者撮影）

基本的な筆使いを練習した後、芸術的表現に目的をシフトさせ３コマ目に好きな文字を選んで好きな書体で作品制作にかかった。各履修者が選んだ文字と書体は以下の通りである。

１）夢　篆書体、２）是永是之　楷書体、３）紫　楷書体、４）人生　隷書体
５）修身　篆書体、６）星　楷書体、７）蜜柑　行書体

書体については、書道室に掲示してある日本人学生のものを見本として直感的に気に入ったものを選択してもらった。掲示されていた日本人学生のものは、漢字の楷書体、草書体、篆書体、隷書体、漢字仮名交じり文が半紙の半分の大きさに書かれたものである。留学生は、楷書体や行書体といった書体についての知識は無い。

「蜜柑」という字句を選んだタイ人の学生が、「私の名前の意味です。」と言っていたように、留学生はこの時点で一つ一つの漢字には意味があることを知っていてそれぞれの表したい「何かしら」を漢字に託して字句を選んだと言える。その「何かしら」を表したものが以下の作品である。

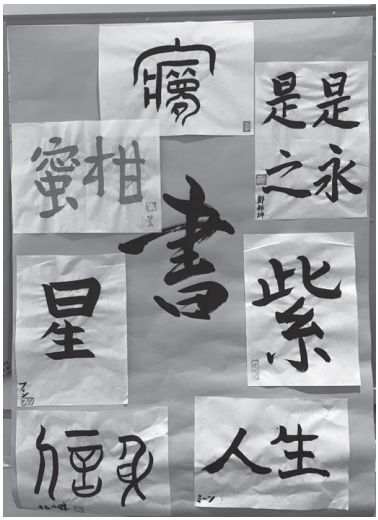


写真７）写真上から時計回りに No.1, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6, No.7

翌８月２日第２日の１コマ目は、前日８月１日に作った作品に押す印を作成した。篆刻と呼ばれて、一般的には専用の石に篆書体で文字を入れて印刀で彫りつけるが、今回は消しゴムはんこで代用した。朱文と白文について説明を加え、平仮名・カタカナ・漢字、音を漢字に当てても良いとことにしそれぞれの構図を作らせた。また、消しゴムに文字を入れるときは反転させることを注意点としてあげた。60 分ほどでカッターで消しゴムを彫ることができた（写真８）。

写真８）篆刻

写真９）Exhibition 準備

２コマ目は、１コマ目に彫った印をそれぞれの作品に押印した。それらの作品とフィールドトリップのまとめを加えて模造紙を使って掲示用の作品を作成した（写真９）。そのあと、この授業の成果と日本文化への個々人の理解を相互に共有するために全員の前でそれぞれ発表する「日本文化理解」授業のプレゼンテーション用原稿を準備した。原稿は、２度のフィールドワークと２日間に渡る書道実践を通して自分が「日本文化」をどのように捉えたのかを中心にまとめた。

３コマ目は、「日本文化理解」授業のまとめとして Exhibition と称して、それぞれの作品を相互鑑賞しプレゼンテーションを相互に聴く時間とした。

写真 10）プレゼンテーション

写真 11）Exhibition

４．結果と考察（目標の達成度）

授業の途中と終わりに全員に以下のような質問紙法によるアンケートを行った。

１．初めて筆で書いたときの印象はどうだったか、　２．どんな字を書きたいか、　３．「日本文化理解」授業の感想、の３点である。

まず１の質問について、難しいと答えた留学生は５名、楽しい・面白い・もっと書きたいと答えた留学生は５名であった。また、へんな字（になった）やきれいに書きたい、先生の字はきれい、と書いた字の美醜に触れている留学生が４名いた（かっこは筆者補足）。

このことから、留学生は日本語の漢字やカタカナ・ひらがななどの文字を美しく書きたいと望んでいるし、これまでの日本語学習の中で日本の書記言語に対す

る美醜の感覚を備えてきているのではないかと考えられる。

授業後の感想として、日本文化の深さと歴史の長さについて７名全員が触れていた。また、書道については漢字の文化は中国から移入されたものであるが、日本文化として変化してきたことを指摘している。神社についても宮司に「近江神社とどちらが古いのか」などと質問する場面も見られた。

日本文化という言葉は、日本にすんでいる人の間で日本という国で特殊で独特な習慣だと思います。日本で書道をするのは２回目です。はじめては家の近くの書道体験室で少しだけ勉強しました。しみじみと日本の文化を感じます。たとえば、筆の持ち方もちがいます。日本はペンと同じ持ち方です。中国でまっすぐ筆を持ちます。これも「和中折衷」の一つではないでしょうか。（下線は筆者が加筆）

日本の書道と中国の書道はぜんぜんちがうと思います。日本の文化は、静という感じがあります。それは儒教文化の克己と思います。（下線は筆者が加筆）

神社といえば最初に思い出すのが近江神社です。「ちはやぶる」がはやっているので近江神社は有名です。建部大社は聞いたことがないです。意外に歴史がすごく長いところです。1300 年の歴史を持っています。近江神社は戦後に建てられた神社です。（下線は筆者が加筆）

日本はオーストラリアより古い国ですから、文化は面白くて深く考えたり習う（ったりする）と楽しいと思います。（かっこは筆者補足、下線は筆者が加筆）

このように、自国の文化と比較したり見識を深めたりするような捉え方をしているのが分かる。

また、日頃見ている日本の漫画やアニメといった文化と比較している学生もいた。

毎日見ている日本の文化と古い文化はぜんぜんちがいます。古い文化はあまり

外国人は知らないですから、はじめて知る文化はだいたいアニメとかまんがなのです。（下線は筆者が加筆）

じっくりと写経をすることによって、入筆の角度などの用筆について気づいた学生もいた。

書道をやる前に、うまくできるまでに何年もかかると知っていましたが、それでも難しかったです。どのアングルで細い字が書けるかもわからなかったんです。でも、書いていたら楽しくてもっと上手になりたいと思い始めました。（下線は筆者が加筆）

日本文化理解の授業では、正しい漢字の書き方と日本の神社見学することと琵琶湖について見学のけいけんをしました。この科目を勉強しなかったら、たぶん日本の文化のことがわからなかったと思います。最近、わかものは知りませんから。日本の文化は古い文化ですけどとくちょうがあって面白いです。私は留学してきましたから日本でいろいろなけいけんをしたいです。

留学生のアンケートから、日本文化を理解するにはフィールドワークや体験が重要であることが窺える。また、一回きりではなくある程度継続してじっくりと取り組むことによって新たな気づきも生まれるのではないかと考える。

日本文化理解の授業を通して留学生は、１）書道体験により書道は難しいが正しく美しく書くことに繋がる、２）用筆により字の太さが変わる、３）現代文化に対する伝統文化を知る、ことに気づく機会を得たことが確認された。

しかしながら、文化として醸成された芸術としての書道を知ってもらうには、用筆法についても授業の中で説明しきれていないし、墨の濃淡やかすれ・滲みといった技法については触れられていない。今後は、今回触れられていない点も含めて留学生教育の中で伝統文化をより深く知り体験する機会を得るカリキュラムの構築やその方途を考えたい。

おわりに

本実践の目標の一つは、「履修生相互のバックグラウンドを理解しつつ他者理解や異文化理解を深めたりする」であるが、留学生は３カ国３言語のそれぞれ違う言語と文化を持つ。しかし、一つの「日本文化」を見つめ、それぞれがどのように捉えているのかを相互理解することである。その点、この授業の Exhibition を通してタイ国で知られている日本文化はアニメで、書道は古い文化でありこの授業を受けて初めて「書道」を知ったという事を中国人留学生が知ったということである。また、お互いに出来上がった作品を見て「J のハンコは独創的だ」「K なんで字がオレンジ色なの」「建部大社はパワースポットだね」などと感想を述べたり意見交換をしたりしていた。さらに、写真を SNS にアップして同国の友人と共有していた。このように地域の古社、地理的特性を知る学習館への訪問や伝統文化書道体験から、一つの目標は達成したと言えるのではないだろうか。

＊本稿掲載の写真は全て筆者撮影、掲載許可を得たものを使用しています。

注

１）滋賀県大津市にある神社

２）滋賀県大津市にある琵琶湖や瀬田川に関する体験型学習館

参考サイト

独立行政法人日本学生支援機構「平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査等について」https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2017.html（2018 年 9 月 29 日閲覧）

サムライブ「日本歴史・伝統文化体験ランキング TOP10」http://tate-school.com/archives/528（2018 年 9 月 29 日閲覧）

リクルート「スタディサプリ」https://shingakunet.com/net/fwSearch/list?keyword= 書道 %E3%80%80 大学 &x=19&y=4&koshuCategoryLCd=010&isParent=false&isGakkoTop=true&pn=2（2018 年 9 月 29 日閲覧）

Japanese Culture Understanding Lesson in International Student Education Course:

Japanese Cultural Calligraphy Practice Report

Hiroko BABA

Calligraphy is one of many traditional Japanese arts, such as Flower arrangement and Japanese tea ceremony. Even though many foreign students come to Japan to learn about its language and culture, there is little chance to experience this traditional art. A chance to delve deep into the Japanese culture and its fine arts is one not many have. The experience most foreign students have in Japan is rather shallow, because most of them have very few chances to actually get in touch with such arts as Calligraphy.

1. Report frame
Report of "Understanding Japanese Culture" lesson. A total of 14 sessions (1 frame 90 minutes, 8 times, breakdown; 1 frame × 4 times, 2 frames × 2 times, 3 frames × 2 times) that are offered for undergraduate international students, short-term exchange students, and research students in the National A University foreign student acceptance program in Japan.

2. Objectives of the lesson
The goal of the lesson is to experience calligraphy and prepare a presentation for the exhibition as talked about in class.

3. Contents of Practice and Its Process
Orientation and preparation 2 frames, calligraphy practice 7 frames, field trip 4 frames, Exhibition 1 frame totaling 14 frames.

4. Results and Discussion (Achievement of Target)
International students got an opportunity to notice that

1) Calligraphy is difficult, but it leads to writing beautifully correctly;
2) The thickness of letters is different per person as well as how one uses the brush;
3) Knowing the difference of traditional culture and contemporary culture.
However, I can not explain the writing method necessary for calligraphy as an art form in the class, and we have not touched techniques such as ink shading and blurring / bleeding. Also, visiting jinjya and the studying hall to know the geographical characteristics, calligraphy practice and exhibition achieved the goal of "Understanding mutual backgrounds of students and deepening understanding of others and understanding of different cultures".